

ジャック・ロンドンの精神の永続性と幻想

——『星を駆ける者』と「水の子」を中心に——

芳川 敏博

序 論

- I. 唯物主義者としてのロンドン
- II. 精神主義者としてのロンドン
- III. 『星を駆ける者』におけるロンドンの精神の永続性
- IV. 「水の子」におけるロンドンの幻想
- V. 『星を駆ける者』と「水の子」の現代的意義
- VI. ロンドンの再評価

結 論

注

参考文献

英文要約

序 論

ジャック・ロンドン (Jack London 1876-1916) は、閉塞感あふれる激動の時代を、勇気と好奇心、忍耐力をもって大胆に40年間の生涯を生き抜いた。『野性の呼び声』をはじめとする50数冊の著作を世に出し、それらは多くの言語に翻訳され、「今日も世界で最もよく読まれつづける作家」(辻井, 2005a: 4) (以下、著者名「翻訳者名」「編者名」, 出版年: ページ数) であると言われ、唯物主義者としてアメリカン・ドリームを体現した強い人間として一般的には知られている。

しかし、真実を追究する姿勢と、人間の社会における個人の存在感を重視する態度は一貫しており、特に晩年、肉体は死により滅びるが、心は死後も残り後生に影響を及ぼすことができるかもしれないと考えた。そして、永眠する前の3年間は精神主義的傾向と幻想が顕著に現れるようになり、ロンドンの作品のスタイルと内容にも大きな変化が生じ、唯物主義と精神主義を超越した幻想の世界にまで高められ、不滅の名作になっている。

ロンドンは動物作家として知られているが、その他の分野の作品、特に精神の永続性や幻想を扱ったものはあまり知られていないか、作品の分かりにくさのために軽んじられている。そこで本稿では、最後に書かれた本格的な長篇小説である『星を駆ける者』と死の直前に書かれた小説(短篇)である「水の子」を中心に、極悪の環境にあってもがき苦しみ、魂の救済を追求するもう1つのロンドンの人間像と作品論を展開し、後期の作品を再評価して、現代的意味を考察してみたい。

I. 唯物主義者としてのロンドン

ロンドンは自分自身を「どうしようもない唯物主義者である」と述べており、それは幼少時代に精神主義者に囲まれていた環境への反抗心から生じたものであると次のように述べている。(Wilson, Margie, 2001 : 23) その環境とは、嫌っていた母親フローラを取り巻く心霊術者たちを指すと思われる。

… When I tell you that I am hopelessly a realist and a materialist, believing that when I die I am dead and shall be forever dead ….

… I was born amongst spiritualists and lived my childhood and boyhood life amongst spiritualists. The result of this close contact was to make an unbeliever out of me.

— Letter to John E. Purdon, January 26, 1915

しかしながら、彼の唯物主義的傾向は以上のような影響と共に、大不況の格差社会の時代に貧しい家庭に生まれたこととも大いに関係がある。幼い頃から缶詰工場や発電所などでの低賃金長時間労働に耐えて一家を経済的に支え、作家になってからも自分の夢の実現（冒険や広大な農園取得、豪邸の建設など）のために1日千語の執筆を続けた。現実から逃避できない苦しみを以下のよう述べて (Wilson, Margie, 2001 : 81), 自分自身の唯物主義的傾向を認めている。

… I cannot get away from the material world in which I live, and of which I am composed.

… It is my conclusion that for as long as I live, I shall be very heavily ballasted with this material world in which I live, and of which it seems that I am a very material part.

— Letter to Aura Hoikha, April 18, 1915

また、大矢健氏は『馬に乗った水夫』（アーヴィング・ストーン著、橋本福夫訳、早川書房、2006）の巻末特別エッセイ「熱狂の唯物論が辿りついたところ」において、ロンドンが熱狂的な唯物論者であると説いている。

ロンドンには、社会主義を信奉しながら資本のロジックにそって、資本主義を生き抜いたしたたかな作家とされている。破格の原稿料をもらい、社会主義という自身の信念をも原稿というかたちで商品化し（ロンドンの誇りだったが、その収入は決して多くはない）、雑誌社を経済的な後ろ盾としつつスナーク号で世界一周旅行を試みた。書くために動いた作家だ。また、当時跋扈（ばっこ）【ばっこ】していた泥棒貴族（ロバー・バロン）さながらに狼城（ウルフ・ハウス）の建設までをも計画した——完成直後に焼失。（大矢、2006 : 454）

そこで、ロンドンが唯物主義的傾向を強く受けていた背景を、彼の生きた環境と作品を分析することにより、より深い理解につなげたい。

i) ロンドンの生きた環境と唯物主義

1876年生まれでロンドンと、アメリカおよびその近郊のゴールド・ラッシュとの関係を考える。1848年1月24日にカリフォルニアのサクラメント近くにあるアメリカン川で砂金が見つかり、翌年の1849年には金鉱脈目当ての人々がアメリカ全土からだけでなく、ヨーロッパや中国からも殺到した。その結果、1852年にはカリフォルニアの人口は20万人まで急増し、西部の開拓が急進展することになった。その後、1850年代にはコロラド州、1874年にはサウスダコタ州、1896年にはカナダのユーコン準州クロンダイク、そして、1899年にはアラスカ州でゴールド・ラッシュが記録されている。

カリフォルニアのゴールド・ラッシュは約7年間続き、ピークは1853年（年間生産量は93トン）であった。ロンドンが生まれた頃にはカリフォルニアのゴールド・ラッシュは終結していたが、クロンダイクのゴールド・ラッシュは1896年から1899年頃まで続いていた。

ロンドンが金鉱発見の報に胸を躍らせたのは、1897年（21歳）である。その年の2月には、養父ジョンの病気による生活苦と授業に対する不満から、カリフォルニア大学パークリー校を一学期ですでに中退している。また、作家で身を立てようと詩や短篇を書くが、東部の雑誌社に受け入れてもらえず、低賃金で1日14時間クリーニング屋でも働いていた。そしてついに彼は、同年の7月にクロンダイクへと向かった。その時のロンドンの心境は、1) 貧困から脱出できる、2) 冒険を楽しめる、と期待していたと Mike Wilson は語っている。(Wilson, Mike, 2001: xiv)

ロンドンの留守中に養父は病死し、彼自身もクロンダイクで壊血病にかかり、1898年（22歳）の8月にほとんど価値のない砂金を持って帰郷する。だが、この体験は5年後の『野性の呼び声』をはじめ、多くのアラスカものの貴重な素材になった。帰国後、クリーニング屋での下働きなどで家計を支えながら再度短篇を書き始めるが、雑誌社へ送った原稿はすべて不採用になる。11月、ついに地元の雑誌社からアラスカものなどの短篇を買い取る通知を受けて、その後作家として生計を立てることができるようになった。

以上のように、ロンドンが成人になり一家の生活を支える重要な時期にあつて、彼は生きるために唯物主義を無視することはできなかった。その他、次のようなことがさらに、好むと好まざるに関わらず彼を唯物主義の道へと歩ませた。

- 1) 1900年（24歳）：婚約者に先立たれたバス・マダーン（愛称ベシー）と結婚し、後年2人の娘が生まれ、扶養家族が増えた。
- 2) 1903年（27歳）：『野性の呼び声』が出版され、一躍人気作家となり、毎週水曜日にホーム・パーティを開くなど浪費癖が激しくなった。
- 3) 1905年（29歳）：グレン・エレンの山中に130エーカーという広大な土地を買い、その後も1913年までに6回農地を購入し、計約1400エーカーの大農園主になった。同年10月、正式に離婚が成立し、以後慰謝料や養育費に多くのお金を必要とした。同年11月、チャーミアンと結婚して、様々な冒険旅行をした。

- 4) 1907年(31歳): 自ら設計した帆船『スナーク』号で、チャーミアンらとともに南太平洋へ航海した。
- 5) 1909年(33歳): 前借りの約束を果たすため、1日9時間、1日千語の割合で執筆活動に専念した。
- 6) 1910年(34歳) シンクレア・ルイスから短篇用物語の構想27本を買い、ほとんど金銭のために書き続けた。
- 7) 1912年(36歳): チャーミアンらとともに、ケープ・ホーン回りの約5ヶ月におよぶ航海にでた。
- 8) 1913年(37歳): 総建設費7万ドルをかけた4階建ての豪邸「狼城」が完成するが、その夜に自然発火で焼失した。年収は7万5千ドルにも達し、世界で最も高額な原稿料をとる作家になるが、手元には数百ドルしか残っていなかった。(『ジャック・ロンドン』(ジャック・ロンドン研究会編, 大浦暁生監修)の年表を参考にさせていただいた。(内野・斎藤, 1996: 261-281))

ii) ロンドンの作品と唯物主義

ロンドンが唯物主義的な傾向にならざるを得なかった背景が、彼の書いた半自伝的小説に表れているので、『アメリカ浮浪記』(*The Road*, 1907)と『ジャック・ロンドン自伝的物語』(*Martin Eden*, 1909)から考察する。

『アメリカ浮浪記』短篇集には、1892年(16歳)～1894年(18歳)のロンドンの体験が綴られている。この頃は、アメリカが大不況に見舞われた時期で、多数の企業が倒産し大量の失業者を出しており、ロンドンも貧しい生活を強いられていた。1893年には低賃金で10時間も織物工場で働いたり、翌年の1894年にはオークランド市の市街電車の発電所で石炭運びの仕事に就き、1日13時間も働いていた。そのような現状を打破しようと、各地で始まっていた失業者の「ワシントン行進」に参加する。途中、約1ヶ月の獄中生活を経験するなどして、アメリカおよびカナダを約9ヶ月にわたり転々と放浪した。「告白」という作品にその当時の悲惨な社会状況の一面が以下のように描かれている。(辻井, 2005b: 103)

この浮浪者時代の修業にこそ、物語作家としての私の成功の多くは^ま拠っているのである。生きるよすがとなる食べ物を得るためには、もっともらしく聞こえる話をしなければならなかったのだ。動かしえない必要から勝手口に立ち、短篇の技巧のあらゆる大家によって策定された説得力と誠実さが展開される。

『ジャック・ロンドン自伝的物語』において、主人公のマーティン・イーデン(ロンドン自身と考えられる)は、19世紀後半のサンフランシスコの貧民街の一角で生活をしていた。その時に、彼の目の前に、上流階級の美しい娘ルースが現れる。この小説のテーマは、「愛と名声」、「社会主義と個人主義」、そして、「芸術と金」という矛盾との葛藤であるとされるが、根本には極度の貧困生活の実態があり、労働者階級と上流階級というアメリカ社会の二重構造、つまり、格差問題を扱っていると考えても過言ではない。そこで、ロンドンが唯物主義にならざるを得なかった生活の厳しさを、この作品の一節から読み解く。主人公が田舎の温泉ホテルの地下にあるクリー

ニング屋で低賃金、長時間の厳しい労働に就いている様子が次のように描かれている。（辻井，2006a：119）

動きのすばやいアイロンが、蒸気の出ている跡を伝って、幅広くすさまじい手ぎわで、それも、ただもう数知れぬピッチで、ひと動きするたびにずいぶん手が伸び、かといって1インチの何分の一も狂わずに、数かぎりない袖やわき腹の部分、背中や裾に沿って移動する。そして仕上がったシャツを、皺くちやにせず^{しわ}に受け入れ口に放り投げるのだ。だから、気ぜわしく心が動揺しながらも、また別のシャツに手を伸ばしている。こういうことが、何時間も何時間も続くのだ。

Ⅱ. 精神主義者としてのロンドン

辻井榮滋氏は『地球的作家 ジャック・ロンドンを読み解く』の「*Martin Eden*をめぐる諸問題1」のなかで作家と作品が時代的環境の制約を受けることの現実と、そこから問題点を掘り起こし、現代的意義を探る必要性を説いている。（辻井，2001：166）

歴史的経緯から言っても、つねに高大な夢と理想を抱き、その実現に向けてひたむきな努力を続けることは、アメリカ人のいわば「明白な宿命」であった。（中略）ジャック・ロンドンが生きた19世紀末から20世紀初頭にかけては、アメリカ史にあっても指折りの激動の時代であり、夢の実現と喪失をめぐって悲喜劇やら矛盾やら（カーネギー鉄鋼会社の設立、（中略））が噴出した。（中略）われわれとしても逆にそれらを下敷きにしてこそ、興味ある問題点を掘り起こし、そのうえで現代との接点を探ることが可能となるだろう。

ロンドンは厳しい現実を見つめ、可能な限り理想を追い求め真実を追究した。理想と現実の板挟みになりながら、真実を捉えることの難しさに悩み、ついに無意識と潜在意識を重視した幻想の世界の中から、精神の永続性という哲学（人は死によって肉体は滅びるが、精神は生き延び発展する）を手に入れた。それを特に、晩年の作品に表現して、より高度の洗練された文学作品を生み出した。

i) ロンドンの精神主義の根拠

The Wit and Wisdom of Jack London から、ロンドンが現実を直視しているが根本的には真実や理想などの精神性の大切さを信条としていることを取り上げる。最初は「真実」（Wilson, Margie, 2001：115），その次は「理想主義」（Wilson, Margie, 2001：119）の必要性を述べている。

Remember that truth is the greatest thing in the world. If you will be great, you will be true.

— Letter to Joan London, August 29, 1913

When every race realizes that all men have the same ultimate goal, they will come to know each other and cease fighting.

— Lecture, “The Patriotism of the Pacific”, May 5, 1915

ii) 『ジョン・バーリコーン』にみる精神主義と幻想

『ジョン・バーリコーン』(*John Barleycorn*)は、ロンドンが37歳(1913年)のときに出版された。この作品には飲酒体験が自伝小説風に語られており、禁酒法制定の先駆的役割を果たしたが、この作品の本当のテーマは「ロンドン自身の魂の救済の叫び」であると思う。

35歳(1911年)から36歳(1912年)には、酒を過度に求めるようになり、その結果、悪夢や不眠症に悩まされる。さらに、腎臓病などの痛みを緩和するために頻繁に深酒をするようになり、ついには、いわゆる「白い論理」という酒がもとで起こる精神的なしつこい幻影に基づく悲観主義や、「死」を意味する「鼻のないやつ」にも悩まされている。この作品は、冒険と飲酒体験というものを単に表面的に語っているのではなく、特に後半の部分には内面的な苦悩もリアルに描いており、ロンドンを理解するうえでもきわめて重要である。

以前にも酒を意味するジョン・バーリコーンが引き金となる悲観主義や幻影はあったが、正常な論理によって回復していた。しかし、今回の場合は相当深刻なものになり、鎮痛剤としての酒を求めてさらに深酒をするようになり、ますます悲観主義や幻影が深刻なものになっていった。そのときの様子と心理状態を次のように描写している。(辻井, 2006b:140)

例の長い病氣—まったく知的な病氣だったのだが—それが再発したのだ。長らく静まっていた昔の幻影が、再び頭をもたげたわけだ。(中略)ところが今度のは、ジョン・バーリコーンの白い論理(ホワイト・ロジック)によってよみがえった幻影であり、ジョン・バーリコーンは、自らがよみがえらせた幻影を決して眠らせてなどおかない。酒がもとで起こる悲観論(ベシミズム)というこの病に打ち勝つには、ジョン・バーリコーンが約束はしても決して手わたすことのない鎮痛剤を求めて、さらに酒を飲まねばならないのだ。

さらにロンドンは「白い論理」の影響で、生きているのが幻想で、死というものが現実であるということを以下のように描写している。(辻井, 2006b:145)人間とは、生まれてから死へと崩壊していくのが本質で、生きているのは大して意味がないという深刻な悲観主義が暗示されている。

私は知っている。生まれてこの方ずっと死へと崩壊していく体のうちに骸骨を携え、そして、顔という名の肉の外皮下には、骨ばった鼻のないしゃれこうべ(デスス・ヘッド)があることを。(中略)白い論理(ホワイト・ロジック)ののろいというのは、人を恐れさせたりはしないということだ。白い論理という人類共通の病によって、人は「鼻のないやつ」の顔にひょうきんににもやにやと笑いかけ、生きている幻をあざ笑ってしまうのだ。

iii) なぜ精神主義的傾向を強めたのか？

なぜ、ロンドンの精神主義的傾向が晩年になって強まっていったのかを推測する。それは、1) 母親の影響、2) 本来の真実追究主義者としての信念、3) 低賃金での肉体的労働からの解放、4) 病気、老化などの影響、5) 森に¹⁾囲まれたグレン・エレンや海に囲まれたハワイでの療養生活、6) ユングの心理学の影響等が、徐々に蓄積して潜在意識となった結果であると考えられる。

母親のフローラ・ウェルマンは心靈術に凝っており、ロンドン¹⁾は家庭で独りぼっちになり、恐怖感にさいなまれるようになった。そして、次第に孤独で神経質な子供になっていった。そのため、自分のことを「狼」と称するようになる。

高校を1年で退学し大学も1学期で中退したが、スペンサーやダーウィン、ニーチェ、マルクスなどの著作を猛烈な勢いで読破したりした。また、社会主義にも接近し、社会の真実を追究するようになる。

低賃金で長時間肉体労働をしている間は、現実の世界から逃避することはできず、それから解放されたときにはじめて精神的な余裕が生まれてくる。そして、徐々に「愛」や「信頼」などにも一定の価値を見いだしている。

若いときにはほとんど病気はしなくて、自分自身を健康で体力があると考えていた。ところが、32歳のとき（1908年）にマラリアと皮膚病で入院してはじめて自分の肉体的な老化に気づいた。さらに晩年には、赤痢、肋膜炎、リウマチ、尿毒症、腎臓結石などに悩まされ、死が迫っていることを自覚しながら農業や執筆を続けた。その結果、さらに内面的な思考を重視するようになった。

ロンドン¹⁾はサンフランシスコの貧民街で生まれ、対岸のオークランドで一家を支えるために唯物主義的な生活を強いられた。そして、29歳（1905年）から40歳（1916年11月22日）で永眠するまで、サンフランシスコの北方約80キロ離れたソノマ谷にあるグレン・エレン村で生活し、作家活動や農業の拠点とした。生命の源泉であり、神が宿ると一般的に言われる森に囲まれ、生きていく実感を得て、精神的な価値観により傾倒していった。

晩年には、妻と共に療養のために3回ハワイを訪問している。（1915年3月、1915年12月、1916年7月）そこでは、「民主主義と資本主義とがうまく作用していて、被搾取大衆の貧困と苦しみもなく大多数の人々に幸福をもたらしている」ということを知った。（辻井、2004：478）ハワイでは異民族が融合しており、ロンドンも現地の人々から尊敬され、精神的な生活の必要性を実感していった。

ハワイ滞在中、カール・ユング（1875-1961、スイスの精神病理学者）を読んで強い影響を受け、自分の創作を再評価することになった。著作は大成功であったが、根本的な主題が効果的ではないと気づいた。このことにより、彼は自分の作品のスタイルを一変し、現実社会の力強い作品から精神的価値を重視した幻想の世界の作品を数多く書くようになった。（永眠する1ヶ月前までのわずか半年の間に11篇の短篇小説を書いている）

『ジャック・ロンドン幻想短編傑作集』の著者である有馬容子氏は、その「訳者解説」で、「ロンドンの研究者たちはほぼ一致して、自分で設計した帆船『スナーク』号での南太平洋諸島の探検とハワイでの生活が、彼の世界観を変える分岐点であったとしている。なかでも、ロンドン研究の第一人者ジーン・C・リースマンは、晩年の南太平洋を舞台にした小説の特徴について、リ

アリズムを放棄してはいないものの、決定論に唯物論を越えた内面的な世界を融合したものと説明している」と述べている。（有馬，2008：216-217）

ロンドンが晩年精神的傾向を強めていった例として、『星を駆ける者』と「水の子」を以下に紹介する。

Ⅲ. 『星を駆ける者』におけるロンドンの精神の永続性

『星を駆ける者』は1914年、ロンドン38歳のときの作品である。この作品は、前年8月のウルフ・ハウス焼失の約2週間後から書き始め、3月22日に完成した。その後、連載形式で登場し、翌年の1915年に出版された。1913年の8月頃までは唯物主義的な思考に陥っていたが、その後は精神主義的傾向を強めこの作品を書いたと思う。そしてこの作品が、彼の書いた本格的な精神主義の作品であると同時に、最後に書かれた本格的長篇小説である点でもきわめて重要である。

アメリカのジャック・ロンドン財団（Jack London Foundation, Inc.）の創設者で、ロンドン研究の第一人者であった Russ Kingman（1917-1993）は「文体が急に変わったことが認められる」という『星を駆ける者』について *A Pictorial Life of Jack London*（1979）の中で以下のように述べている。

『星を駆ける者』は、多くの人々によって彼の最高作と考えられ、国中の多くの新聞の『アメリカ日曜月間雑誌』（雑誌付録）で連載され、『大きな家の小さな婦人』が出版社に発送された。（辻井，2004：459）

ジャックの『星を駆ける者』が1914年に連載形式で登場した時、注意深いロンドン研究者なら2つのこと—1つは、彼が自分の余命がいくばくもないのを知っていたことであり、もう1つは、以前とは違う創作テーマに手を伸ばしていること—に気づいていただろう。その非現実的な体験方法を使うことは、新しく刺激的であった。この本は、当時の腐敗した残忍な刑罰制度を暴くことを目的とした理想主義と精神主義とが、いわくありげに交錯したものである。（辻井，2004：480）

『ジャック・ロンドン』（1974年出版の研究書）の中でアール・レイバーは、この作品を次のように述べている。

『星を駆ける者』は、ロンドンの望んだ「びっくり仰天するような迫力（パンチ）」ではないにしても、退屈な本ではない。モレルの話を主要な物語の基礎としながら、ロンドンは一連の魂の飛行記をつけ加えたわけだが、そのうちのどれ1つをとっても市場向きの短篇になったであろう。つまり、ダレル・スタンディングという語り手が、非現実的な体験によって、以下の前生の一部を甦らせるのである。（辻井，2004：480-481）

そして、主人公のダレル・スタンディングの主な非現実的な体験、つまり、幻想を次の6つに要約している。（辻井，2004：481）

- (1) ルネサンス末期にデューマ（19世紀フランスの小説家・劇作家の同名父子）流のマダム・キラーでフェンシングの名手，フランスの伯爵ギョーム・サント＝モール。
- (2) アーカンソーから荷馬車でやって来て，悪名高い山の牧草地大虐殺（マウンテン・メドウ・マサカー）でモルモン教徒とインディアンに殺される若者ジェシー・ファンチャー。
- (3) エジプトの砂漠のちっぽけなほら穴に住む，4世紀のキリスト教修道僧。
- (4) 16世紀の東洋にあって「黄禍」（イエロウ・ペリル）（黄色人種の勢力伸長に対して欧米人が抱いた恐怖感）とみごとに闘う金髪の超人アダム・ストラング。
- (5) ローマ軍との戦いで捕虜となり，その後キリストの磔^{はりつけ}の時期にピラト（キリストを処刑したユダヤのローマ総督）のもとで古代ローマ軍団の将校となる超人的デンマーク人ラーグナー・ロドブロッグ。
- (6) 19世紀のはじめに無人島で8年間生きつづける難破者ダニエル・フォス。

i) 要旨

『星を駆ける者』（森美樹和訳，1975年，国会刊行会）について概略を述べる。Roverとは、「さまよう人」という意味があり，*The Star Rover*とは，ロンドンが肉体的苦痛から逃れ，時代と空間を超えて自由な意思に基づいて飛び回る理想郷を暗示していると推測される。（イギリスで出版の書名は，*The Jacket*: 狭窄衣であった。）

主人公ダレル・スタンディングは，カリフォルニア大学農学部の耕種学の教授である。「赤い激怒：red wrath」に心を支配され，怒りの発作に駆りたてられたまま友人の教授を殺害し，終身刑を宣告された。「赤い激怒」こそが，まだ全世界が幼かった頃の，ぬるぬるした生物から彼が受け継いできた破壊的な不運な天性であると信じていた。当時36歳で，現在は44歳である。この間の8年間をカリフォルニア州立刑務所で過ごした。

この間，狭窄衣（jacket）によって生殺しにも近い仕打ちを刑務所長から受け，孤独な独房生活を送っていた。しかし，自己暗示によって苦悩を緩和しているジェイク・オッペン・ハイマーや，肉体から精神を離脱することを教えてもらったエド・モレルのおかげで，肉体の苦悩から放たれ，精神の自由を獲得し，「星を駆ける者」として時空を超越して旅をした。

その後，他の囚人の「わな」により，ダイナマイトを仕掛けた犯人と間違えられ，さらに激しい狭窄衣による罰を受ける。また，看守に暴力をふるったということで，死刑が宣告される。死を間近に控えて，「文明というものは，残忍性の上にわずかばかりの飾りをつけたものにすぎない」，「物質に精通したことに助けられ，地獄へ墜ちるような罪を作り出した」，「この世で一番すばらしいものは女であり，暗闇のあとにふたたび生を受け，その新しい世界で女に出会う」，「肉体は滅びるが，精神は不滅である」と考えるようになり，死の恐怖から逃れるようになった。さらに，「地位の高い者に訪れる苦悩や破壊を，うんざりするほど体験した」。だから，「次に肉体に宿る時には，穏和な農夫になりたい。その夢見る農園がある」と言う。死刑になる直前には，全ての苦悩から解放され，精神の永続性を信じ幸せな気分になる。

ii) 精神の永続性に関する記述

次に各章ごとに、重要だと思われる箇所と精神の永続性に関する部分を、森美樹和氏訳の『星を駆ける者』に基づいて各章ごとに記述する。

- * 「生まれてこのかた、わたしは別の時代と別の土地のことを意識し続けていた。自分の心の中に、絶えず自分以外の人格を意識していた。」第1章（p.7）
- * 「わたしの潜在意識の目覚めているわずか15分のあいだに、わたしは原始世界の軟らかい泥の中を喰りながら這いまわったと思うと、とたんにハースファーズの側にすわり、飛行船に乗って20世紀の大気を切って進んだ。」第2章（p.59）
- * 「わたしはこんな身なりで星間宇宙を駆け巡り、自分が途方もない冒険をするはずだという考えに有頂天になっていた。そんな冒険の最後には、きっと宇宙の全法則を見だし、宇宙の究極の秘密を詳らかにできるものだと思っていた。」第3章（p.105）
- * 「この世界が邪悪きわまりなく、人生は悲しいかぎり、ありとあらゆる人間は死の定めを持っている……いや、死んでいるということがわかるだろう。それゆえに、邪悪と悲惨から逃れるため、当世の男たちはわたしのよう、驚異と無神経さと狂気に満ちた悪戯を求めているのだ」（中略）「神が死んだのだ、ポンよ。おまえは知らなかったのか？ 神は死んだ。わたしもまもなく死ぬ。20の農場を肩にかけてな」第4章（pp.113-114）
- * 「ジェス、死と生とがうまく調和を保っていることを知っているか？ 死んだ者は、すぐに生まれ変わるのだよ。すぐにな。おまえは今日もう少しで殺される場所だった。だが、こうしてここにいる。大きくなったら、カリフォルニアで大きな家族をつくれよ。カリフォルニアでは、何でも大きくなるぞ」第5章（p.187）
- * 「航海の最後になると、わたしたちは海図に記載されている日本を訪れた。だが日本の住民は、わたしたちと取引をしようとはせず、大小の刀を腰にさした男どもが、ヨハネス・マールテンス船長すら思わず生つばをのむような、見事な絹の服を身にまといやってきて、丁寧な口調で、どうか立ち去っていただきたいと要請してきた。彼らの慇懃な態度のなかには、争いごとの好きな気質が潜んでいることを知っていたので、わたしたちは錨をあげて出航した。」第6章（pp.214-215）
- * 「わたしは野良犬から骨を奪い、道にこぼれた米をひろい、寒い夜には湯気のたつ豆のスープを盗んだ。わたしが死ななかつたのは不思議でもなんでもない。わたしは2つのことに支えられて生きていた。1つは、わたしのそばに貴婦人オムがいるということ。そして、今1つは、いつかチョン・モン＝ジュエの咽喉に指をくいこませてやる日がくると信じていたことだ。」第7章（p.259）
- * 「わたしが肉体を死の状態におとし入れる時、わたしの精神はどこをさまようかわからなかった。わたしには時代も土地もまったく見当がつかないような経験は何度もあった。そんなときのわたしのせめてもの楽しみは、太陽が光をなげかけた時、岩の上に横たわって日光浴をすることだった。岩はぞっとするほど冷たかった。」第8章（p.266）
- * 「肉体は安っぽいむなしなものだ。草が肉体であり、肉体は草になる。しかし精神はやむことなく存在し続ける。わたしは肉体讃美者には我慢ができない。もしも肉体讃美者がサ

ン・クウェンティンの独房を味わえば、きっと精神を讃美するように、すみやかに宗旨変えをすることだろう。」第9章（p.312）

- * 「死は存在しない。生命とは、精神であり、そして、精神は死ぬことがない。肉体だけが死に、姿を消す。精神は、情報を備えた化学酵素によって、絶えまなく変化し続け、束の間^まのうちに形を失う肉体をふたたび克ち得るのだ。精神のみが、光に向かって上方に働きかけながら、とぎれることのない無限の輪廻^{りんね}転生をつづける。つぎに生まれ出る時は、わたしは何者になるのだろうか。いまはそれだけを考える。はたしてつぎに生まれる時は……」第10章（p.351）

iii) この作品の重要性

上掲の精神の永続性に関する記述から、この小説は単に死刑制度に代表される人間の残忍性や、肉体からの離脱方法のような「闘い」を説いたものではなく、ロンドンが生涯を通じて追究した「世界を支配する真理」を描いているのではないだろうか。そこには、永遠不滅の精神性・愛の讃歌があると思う。また、この作品は、ロンドンの作品と生涯の総まとめであり、物質と精神、科学と哲学、現世と死後の世界を統合するものであり、彼の最高傑作の1つであり、遺言でもあると思う。

『星を駆ける者』の訳者である森美樹和氏は「あとがき」の中で、ロンドンの「狼城」（ウルフ・ハウス）と唯物主義、社会主義、そして、真理探究について次のように述べている。（森、1975：355-356）

ジャック・ロンドンの生涯を端的に示すものとして、よく〈狼城〉が例にもちだされる。城というのもおこがましい巨大な〈狼城〉は、完成と同時に、謎の大炎上をとげた。莫大な金銭と長の歳月というエネルギーを要したこの〈狼城〉は、必要なエネルギーをすべて吸収したとたんに、無に帰してしまった。それはまるで、作家としての金銭欲と名誉欲、それらと真向から対立する社会主義を同等にみつめながら、〈純粹〉という名のタイト・ロープの上を全速力で駆け続けどちらにも純粹であろうとしたあげく、自殺してしまったジャック・ロンドンの生涯そのものでもあるかのようだ。

ロンドンの死因については、森美樹和氏のように自殺説をとる者もいれば、キングマンのようにそうでないと主張する学者もいる。²⁾しかしより重要なことは、ロンドンが死ぬ直前にどういう肉体的・精神的状態にあり、そのことがロンドンの文学にどのように反映されているかを探ることではないだろうか。

日本ジャック・ロンドン協会名誉会長の辻井榮滋氏は、2008年6月の同協会第16回年次大会における講演で、「ロンドンが永眠する1916年（40歳）には、肉体的には病気や老化などから自殺を考えてもおかしくないくらいボロボロの状態になっていた」と述べている。死の直前のロンドンの肉体が最悪の状態になっていたことは、異論がないであろう。しかしながら、死の直前の精神的な状態は、肉体的な状態とは正反対に意気揚々としていた。以下、有馬容子氏とアール・レイバーの主張を紹介する。

- 1) ロンドンには1916年11月22日に歿する約1ヶ月前までの僅か半年の間に、11編に及ぶ短編を書き上げた。それは病状の悪化を考えれば驚異的であり、なにか超自然的な力さえ感じられる。それほどまでの爆発的な創造力の発露は、余程の内面的な変化が生じていたことを物語っている。(有馬, 2008: 217)
- 2) 現在では多くの研究者たちが彼の言動や作品の内容から判断して、徹底した唯物的一元論者であったことを疑問視している。(有馬, 2008: 215)
- 3) London's fascination with the spiritual, rejected dogmatically in his earlier years, culminated with his discovery of Jung's ideas in the summer of 1916. (レイバー, 1994: xix)

IV. 「水の子」におけるロンドンの幻想

1916年11月22日に他界する数週間前(10月2日)に完成させた「水の子」(“The Water Baby”)は著者の遺作(短篇)である。この作品はロンドンが永眠後の1918年に *Cosmopolitan* 誌に発表され、1919年に Macmillan 社から *On the Makalooa Mat* という短篇集の1つとして収められた。一時期ハワイに暮らしていたロンドンは、南太平洋の島を舞台にした短篇を多く残している。そのうちの1つである「水の子」の概略を、柴田元幸翻訳版『火を熾す』により紹介する。南太平洋(ポリネシア)に浮かぶ一艘の舟の中、私(ラカナ)(ポリネシア生まれの若者。体調が悪く船酔い状態)は老人(コホクム)(ポリネシア生まれの老人。酒に勝ち、絶好調)より昔から語り継がれている話を聞く。以下に、物語のポイントと、真理と幻想に関する記述を要約する。

- 1) ポリネシアの半神であるマウイの偉業と冒険。天に結びつけた釣針で海底から陸地を釣り上げた。人間たちが歩けるように空を持ち上げた。太陽をもっとゆっくり回転させた。キリストと違って、何一つ作りはしなかったが、物事を整えただけであった。ある程度、証明できる事実がある。人は昔、四つ足で駆け回っていた。地球の自転速度は遅くなっている。ハワイ諸島全体が火山の活動によって海底から隆起した。
- 2) 本当に起きたと老人も思っている話。ケイキワイという名の男の子(名前は「水の子」という意味)はまさに水の子で、この子の神々は海と魚の神々であり、この子は生まれつき魚の言葉を知っていた。サメたちに語りかけ、サメたちの間に不信感を増幅させ、堂々と海中深く潜り、サメに攻撃する機会を与えずに、目的のロブスターを手に入れた。これもある程度、証明できる。老人の父親は、水の子の父親の叔父の孫の知り合いだった。海底には、水の子が投げ込んだ39個の溶岩のかけらがあった。
- 3) 真理と幻想: 「人間は真理を作らない。人間は、盲目でないかぎり、真理を見たときにそれを真理と認めるのみだ。わしが思ったこの思いは、夢だろうか?」「夢は深くまで、ずっと下まで降りていく、もしかしたらはじまりよりもっと前まで。」「何もかも忘れてなくなるまで、くたくたに疲れて。だから酒を飲み、釣りに行き、昔の歌を歌い、空で歌うヒバリになった夢を見る。この夢が一番好きだ。酒をしこたま飲んだときによく見るんだ—」

ラス・キングマンは、*A Pictorial Life of Jack London*の中で、“The Water Baby”とハワイにおけるロンドンについて次のように述べている。（辻井，2004：482）

『白い論理』（1975年出版の研究書）のジェイムズ・マクリントックによれば、「ラカナがコホクムと議論するのは、キリスト教およびポリネシア神話、進化の科学的理論の基礎、夢の性質、そして、究極的には生と死の意味である」カミアニというのは、ハワイの人たちが彼らの一員として受け入れたハワイの非原住民につけた名前だが、この名前が与えられるのはきわめてまれなことであった。

有馬容子氏は、晩年しばらく短篇小説から離れていたロンドンが、再び短篇に取りかかった初期の作品である“The Red One”「赤い球体」（1916年5月22日完成）と最後の作品である“The Water Baby”「水の子」（1916年10月2日完成）には、認識の本質に関する問題が真っ向から取り上げられているなど共通点が多いと指摘し、次のように説明している。

若者ラカーナは「赤い球体」のバセット同様、非合理的な説明に懐疑的な人間であり、ロンドンの分身と考えられる（ラカーナはロンドンのハワイでの呼び名）。そして彼もまた、体に変調を来しており、気分が優れず正常な意識が遠のきがちになっている。このような設定からバセットが「赤い球体」と対面を果たしたときのように、カラーナもまた最後に新たな認識に達することが暗示される。また、「赤い球体」では独特の宗教観を持つ知患者ガンが描かれるが、この作品でも、それに匹敵する知患者コホクムが登場する。コホクムはハワイ語で「知恵の木」を意味する。そして、この2人こそ、晩年のロンドンが共鳴した認識に関する考え方を共有しているのである。（有馬，2008：227）

コホクムはどうだろうか。彼も叡智は人間の心の深淵に存在すると考えている。カラーナに「年をとると自分の外に真実を捜すことは減って、自分の内により多くの真実を見出すようになるんだ」と述べ、「[海である] 母親のところへ戻り、母のところから生まれ変わり、太陽の中へ現れるという」真実は「俺の内から、海と同じぐらい深い俺の心の深淵から生じてきたんだということ以外は分からない」というのである。（有馬，2008：228）

Clarice Stasz は *American Dreamers* の中で、ロンドンの人生を3つに分けている。最初の段階は、*An Elusive Eden*（楽園とはほど遠い）と称して、青年期までロンドンは悲しさにくれて世の中をさまよひ、永遠の真実を探し求めていた時期であるとしている。次の段階は *A Garden On Earth*（地球の楽園）と称し、人々と交流し、世界を冒険し、グレン・エレンやハワイという楽園に出会う時期である。最後の段階は、*From Wilderness To Redemption*（混乱から精神の安定へ）と言っている。言いかえれば、ロンドンの人生は、最初、精神的・物質的に満たされない状態から学問、恋愛、冒険、社会主義、過激な労働でもって上段階に進もうとしてした。そして、すべてを手に入れ、精神的にも物質的にも満たされるようになった。だが、晩年、死という避けることのできない真実を前にして、今まで手に入れたものに矛盾を感じ、唯物的な考え方に懐疑

的になってきて、精神的な安定をより求めるようになった、と考えられる。そして、彼が最後に書いた「水の子」について、「物語の最初の部分で、海を生命の源であるとし、死と死後の生命の復活を暗示する。また、ロンドンがユングの心理学の本を読んで精神の永続性に感銘を受けるが、現実のロンドンはこのことを疑っている。このことを示すために、ロンドンが40年間闘ってきた不安や欲望のために40匹の鯨が自滅する話が展開される」と述べている。

As with “The Red One,” this story lends itself to extensive interpretation of the symbolism. The first half of the tale concerns death and rebirth imagery, with the Great Mother of the sea as the source of new vitality. The old London, made wise by his readings of Jung, respected this source of renewal, but the real physical London was exhausted and doubtful, hung over from grasping too much of life.

To emphasize his point, the wise voice tells of the forty sharks destroying themselves through insecurity and greed, just as London’s impulses had warred within him for forty years. (Stasz, 1999 : 313)

ロンドンは、40歳で他界する前18ヶ月のうちの12ヶ月をハワイで過ごした。ハワイとの出会いで得られたものを、Andrew Sinclairの*Jack London: Tales of the Pacific*のIntroductionを参考に列挙してみる。(Sinclair, 1989 : 10)

- 1) 病気や老化から生じた肉体回復のための静養。
- 2) 1914年に始まった第1次世界大戦の恐怖を忘れること。
- 3) ハワイの人々のやさしさや愛というような精神的な価値を認めるようになること。
- 4) 生か死かというような極北の地とは逆の、人種間の融合を認める場所もあるという認識を得ること。
- 5) ユングの*Psychology of the Unconscious*に接し、自己認識のために無意識と夢が有効であることに気がついたこと。

また、Andrew Sinclairは上記の本の中で、「ロンドンは壮年期の自己矛盾を解決するために、内面的な闘争を通じて、死ぬ直前になって自己や社会に対する認識を根本的に変えた。それは、ダーウィンやニーチェ、マルクスの考えから、フロイトやユングの自己認識という考えに大転換した」と、以下のように述べている。(Sinclair, 1989 : 11)

It was a tribute to London’s enduring mental fight that he succeeded toward the end of his short life in transferring his analysis of himself and human society from the imperatives of Darwin and Nietzsche and Marx to the self-awareness suggested by Freud and Jung and to a Proustian reaching back to childhood in order to explain the contradictions of his adult personality.

ロンドンには死ぬ直前になって大変身をして、より成熟したバランスのとれた人格を手に入れた。つまり、物質→精神、現実主義→幻想、力→繊細さ、男性→女性、人種→人種の壁を越える、というように自分や社会に対する自己認識の一大変革であった。今までは、現実から逃れることはできなかったもので、価値観の大転換は不可能であって、思考の分裂とか、人格の二重性とか非難されたが、死の直前になってそれが可能になった。死の直前までは生にしがみついていたが、死が間近なことになると、死を前向きに受け止めて、肉体は死ぬが、精神は生き延びるというように考えるようになっていたと考えられる。特に潜在意識を重視した内なる闘争により、精神の永続性を熱望し、幻想により真実が捉えられ、人生の根本的問題が解決し、人間の存在理由が明らかになった。

精神の永続性と幻想という悟りの世界に達することにより、視野と見識を深め、人間として成長した。そのような状態になって書いた精神の永続性を重視した幻想文学は、より時代と世界を超え、人間共通の問題を扱う普遍的な文学になった。有馬容子氏は、ロンドンが晩年に幻想作家になったことについて次のように述べている。

晩年のロンドンは実際的な世界から離れたときにこそ、作家としてのインスピレーションを得ていたようだ。彼の物語は現実離れた世界を背景に描かれることが多くなった。すでに、他の時代他の国の人にも伝えることのできる普遍的な語り方を模索し、真実を描こうとする現代的な幻想文学（ファンタジー）作家となっていたのである。（有馬、2008：233）

V. 『星を駆ける者』と「水の子」の現代的意義

日本において『星を駆ける者』の翻訳本は、1976年に出版された森美樹和氏の抄訳だけで、それも現在では絶版になっており、入手がほとんど不可能になっている。「水の子」については、2008年の柴田元幸氏と有馬容子氏の翻訳本によってようやく紹介されたという状況である。一方、『星を駆ける者』の英語版である *The Star Rover*（イギリスでは *The Jacket*）については、世界的な英語の書籍を扱う Better World Com (<http://www.betterworldbooks.com/>) では、24件も検索できた（2009年2月28日現在）。いかに『星を駆ける者』は、現在では比較的世界的に読まれる作品になっているかが分かる。「水の子」は *On the Makaloa Mat* という短篇集に収められているので、そのタイトルで検索すると、6件だけであった。これも日本より多いが、『星を駆ける者』に比べて、まだまだ世界的にも知られていない。

ロンドンは40年という短い生涯で約220篇のフィクションを書いたが、いまだに彼は世界的にも日本国内でも初期の作品である『野性の呼び声』（『荒野の呼び声』）と『白（い）牙』の極北ものの動物作家であるというように一元的なイメージが定着している。最近になって、社会文明的な作品、南海もの、晩年の作品、未発表の記事やエッセイが数多く出版されるようになってはきたが、ロンドンと彼の作品の全体像を捉えるにはまだまだ十分とは言えない。特に1913年以降、彼が唯物主義から精神主義に認識の方法を大幅に変更し、内面の無意識の世界に奥深く入り込み、生と死を見つめ人間の存在理由を探求する哲学に基づき書かれた普遍的な作品が、まだまだ定着

していないのは残念である。

キングマンは、*A Pictorial Life of Jack London*（辻井栄滋訳『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』）（改訂版）のなかで、『星を駆ける者』と「水の子」が含まれている『マカロアの木陰に』短篇集が、当初、アメリカ文学において相当の地位を得なかった理由を、「ヨーロッパにおける戦争のことが一般読者の心にのしかかっていたので、出版業者によるこれらの本の普及が十分ではなかったのだ」と説明している。（辻井、2004：482）

i) 『星を駆ける者』再考

最後に出版された本格的な長篇小説である『星を駆ける者』（*The Star Rover* または *The Jacket*）は、「ロンドンの歴史的、社会学的、心理学的知識を総動員する他と比較できないほど野心的な作品で、準備に相当の年月を要した」と James Williams は *Jack London Newsletter*（Vol. XX, No. 2-3, May-Dec., 1987, p. 80）で以下のように述べている。

No other novel by London required so much preparation because this was his most ambitious insofar as his desire to bring to bear the full range of his historical, sociological, and psychological knowledge — both for himself and of mankind — to novel writing. . . . *The Star Rover* contains the essence of eight stories that London had been contemplating, in two cases, for more than ten years. The other six story ideas occurred to him as he wrote the novel.

上記のようにこの作品は、作家生活の後半に時間をかけ構想を練ってきたロンドンの作品の総まとめである。ロンドンのあらゆる知識を総動員して、8つの興味深い物語が展開する。これだけでも1つ1つが立派な短篇小説になるだけでなく、最初と最後には、彼の一生を通じての潜在意識や精神の永続性が語られている。それゆえにこの作品は、短篇・長篇、フィクション・ノンフィクションをという枠を超えた、SFという1つのジャンルには収まりきれないほどの作品なのである。

*The Star Rover*の最初は、次のように始まっている。ロンドンがよく、物語の最初を、全体の話の概要を暗示するような言葉から始めることが多い。『星を駆ける者』の訳文を記載すると次のようになる。ここでは、「現在いる人間は、過去の人間の体験や精神の結果として存在するもので、肉体は死によって滅びるが、精神は他に移動して絶え間なく変化し続ける」ことを暗示していることが分かる。

生まれてこのかた、わたしは別の時代と別の土地のことを意識し続けていた。自分の心の中に、絶えず自分以外の人格を意識していた。どうかこのことを信じていただきたい。これを読んでいてあなたがたとて、けっきょくは同様なのだから。子供の頃を思い起こしてみれば、わたしの言っている感覚のことが、幼かった頃の経験として記憶にまざまざと甦^{よみがえ}ってくるだろう。その頃、あなたがたの考え方は、まだなにものにもとらわれていなかった。あなたがたは柔軟だったのだ。そして精神は絶え間なく変化を続け、判断力も自意識もすべて

は形成の過程—そうだ、形成と忘却の過程—にあったのだ。（森，1975：7）

物語の後半には、独房でもなく死んでいく局面で、スタンディングは以下のように、「永遠に不滅ですばらしいもの、それは、生命の元である女（母=生命）と精神であると述べて、仏教で言うところの「輪廻転生」を説いている。

わたしは今監房の中で腰をおろし、もの憂い夏の午後を、蠅の羽音を耳にして過ごしている。わたしに残された時間はあとわずかだ。まもなくわたしは、カラーのないシャツを着せられるだろう……だが、わたしの心、わたしの精神は不滅だ。暗闇のあとにわたしはふたたび生を受け、その新しい世界で女に出会うのだ。星は絶えまなく動き続け、天空も変化し続けるが、この世にはただ1人の、光彩陸離たる女が存在し続ける。ちょうどわたしが、ただ1人の男として存在し続けたように。（森，1975：336-337）

主人公は、カリフォルニアの独房に入れられ狭窄衣（jacketとは、brutality：「残忍性」も意味する）によって独房の看守によって厳しく締めつけられ、いわれもないことを告白することを迫られたとき、肉体の極限に達したところで精神を肉体から離脱させ、痛みを感じなくさせた。ところが、独房で看守に殴りかかって鼻血を出させたために、1913年にカリフォルニア州の法律で絞首刑になる。このように、人間の残忍性と道徳心の低下を嘆き、過去のすばらしい知恵を人間存続・幸福のために一人一人が高める努力をすることが人類が生き延びる条件である、と次のように述べている。また、唯物主義について否定的な意見を述べているのも、注目すべきである。

わたしは長い歳月を通して、多くの人生を生きた。過去の1万年間を通じて、人間の道徳は少しも進歩しなかった。（中略）道徳とは社会の貯えであり、苦痛にみちた歳月を通しての添加物なのだ。長い歳月にわたって蓄積されてきた、抽象的な道徳によって磨きあげられ、訓練されないかぎり、赤ん坊は残忍になるだろう。（中略）人間は想像力をふるい、物質に精通したことに助けられ、地獄へ墮ちるような罪をつくりだした。人間以外の動物は、罪をおかすことなどできないのだ。（森，1975：345-346）

また、絞首刑の直前には死の恐怖心は完全になくなり、死を新しい旅立ちと主人公は考えている様子が、次のよう述べられている。つまり、精神の永続性の境地に達しているわけである。

わたしは刑務所の中で一番おとなしい囚人だ。まるで旅に出る子供のように。早く行きたい。新しい土地を見たい。些細な死があるが、何度も死を体験して蘇^{よみがえ}ったわたしにとっては、恐怖などあるはずもない……（森，1975：349）

筆者は日本ジャック・ロンドン協会第16回年次大会で「ジャック・ロンドンの闘争と現代的意義」と題して発表をし、ロンドンの「本質は精神主義者である」と切り出し、彼の「偉大さは、矛盾だらけの無秩序な激動の時代を、理想を忘れず勇敢に生き、世の中や人生の重要問題、そし

て、人間をリアルに描きだし、世界中の人々に、再考を促していることだと思う」と、結んだ³⁾。

また、滝田洋二郎監督の「おくりびと」が、米アカデミー賞外国語映画賞を獲得する快挙を成し遂げて、「日本の死生観がアメリカを魅了した」と、2009年2月24日付の京都新聞（朝刊）は報じた。このことから考えても、世界同時不況の今日、ますます心の豊かさを重視するようになっていくことが分かる。以上のような観点から、『星を駆ける者』を今まで以上に再評価することが大切である。

ii) 「水の子」再考

最後に書かれたロンドンの作品は、“The Water Baby”である。（1916年10月2日完成）（実際には“Eyes of Asia”と言う作品は、1916年10月16日からロンドンの永眠の前日である11月21日まで書かれ未完成に終わったが、後年妻のチャーミアンが“Cherry”と題して完成させた。）人間は死の直前に、その人の本音（深層心理）が現れると思うので、最後の作品はその人を理解する上で非常に重要であると思う。有馬氏も、「死の1ヶ月前に書かれた作品だけに、この終わり方はロンドンが最後にたどり着いた心境を表していると言えよう」と述べ、永眠する直前には精神主義的傾向がかなり強くなっていると以下のように述べている。

コホクムがカラーナに語るハワイに伝わる鯨の逸話は、唯物主義的な知恵しか持たないものの破局を象徴的に物語っている。いつもの理性的な意識が鈍っているカラーナは、最後にはコホクムの非合理的な説明を頭から否定することができない。（有馬、2008：228）

Shark（鯨）は、『ジーニアス英和辞典』によると、「達人」という意味と、「強欲な詐欺師」という意味がある。なるほど、「水の子」における鯨は、集団で働くとともに強くなる。集団で働くには、お互いの信頼や協力が不可欠であるが、40匹の鯨たちは、半分魚で魚の言葉を話す11歳の子供である水の子ケイキワイの策略にひっかかり、次から次へと仲間の鯨を食べてしまう。そしてついには、最後の鯨は仲間の鯨を食べ過ぎて、腹が破裂して食らったすべてのものをさらけだして死骸になってしまう。つまり、この作品の1つのねらいは、人間は貪欲になり過ぎると、人間として大事なことを忘れがちになり、自らを滅ぼすことになる、ということであろう。

さらに、「水の子」のもう一つのテーマは、真理に達するための幻想（空想）の役割であろう。この作品にはハワイの神話とユングの心理学が溶け込んでおり、現実的な考えや論理だけでは理解しにくいところが多い。柴田氏の翻訳では、最初次のようなマウイの神話から始まる。

老コホクムがマウイの偉業と冒険をえんえん唱えるのを、私はいささかうんざりした思いで聞いていた。マウイとはプロメテウスにも似たポリネシアの半神で、天に結びつけた釣針で海底から陸地を釣り上げ、また、それまでは立つ余地もなく這って動いていた人間たちが立って歩けるよう空を持ち上げてやり、さらに、16のもつれあった脚を持つ太陽を立ち止まらせ今後はもっとゆっくり空を渡ると約束させた張本人である。（柴田、2008：79）

事実を積み重ねていけば真実になると一般的に考えがちであるが、現在存在するものを全て捉

えることもできなければ、その1つの事実を完全に捉えることも不可能である。また、人間は本来自己中心的で、自分の見たいと思ったものしか認識の対象にならないし、見たいように認識する傾向がある。つまり、1人の人間の認識には限界があって、いくら賢い人間でも全てを分かっていることはない。全て分かっていると思っている人は、傲慢になり、人間らしい生き方において大きな間違いを犯すこともある。いくら当時の西洋・東洋の学問を習得し、いろいろな人々と会い、いろいろな職業に就き、いろいろなテーマについて熟考してきたロンドンであっても、神のように全てを知り尽くすことはできないのである。晩年その限界に気がつき、ユングの『無意識の心理学』に没頭したのであろう。つまり、「人間が現在あるのは、過去のいろいろな人の体験や思考の積み重ねである」ということに気づき、それには、非日常的な無意識の世界、つまり、幻想の世界に達することが必要であると考えようになったのだと思う。そのように、ロンドンは人生を考えたりそれを作品に表現するうえでも、強烈なインスピレーションを「幻想の世界」から得たのであろう。⁴⁾

純粋な論理だけでは、全てを捉えることはできないだけでなく、人間を破滅に追い込むこともあるというのは、ロンドンの短篇である「影と光」(“The Shadow and the Flash”) (1903) にもみられる。ポールとロイドは競争して見えない物の開発をするが、そのためにお互いに自滅するシーンは次のごとくである。この作品は『アメリカ残酷物語』にあるので参照する。⁵⁾

見えるものといえば、影のしみと虹の閃光と見えない足から立ちのぼるほこりと、足でぐっと踏んばることで足もとから崩れていく地面と、一度二度と二人の体がぶつかるたびに隆起する金網だけだった。それだけだった。しばらくすると、それさえびたりと止んだ。(辻井・森孝晴, 1999: 44)

このことを極限までつきつめたのが、ロンドンの作品で最後に出版された『殺人株式会社』(The Assassination Bureau, Ltd.) である。『星を駆ける者』の訳者である森美樹和氏は、次のように説明している。

未稿のままに残されたこの作品は、ロバート・L・フィッシュがロンドンのメモを頼りに、残り3分の1を書き加えて1963年に刊行されたが、殺人さえもが論理によって行なわれ、自己の信ずる論理のため、自分の暗殺をも認めるという奇想天外な物語である。(森, 1975: 355)

最後の作品である「水の子」のメッセージは、新しい生命の誕生であろう。海という場面設定で、水の子ケイキワイは鮫を恐れずに海底奥深く潜り、王の好物のロブスターを手に入れる。海は幻想(無意識)ということの象徴だけでなく、人間の母なる海、つまり、生命そのものも表している。現代の科学では、人間は宇宙の隕石から生まれ、海に落ち、そこからアフリカ東部の陸地に上がり、森に住み、世界各地に移動していったと言われている。そうすると「水」は、新しい生命の誕生である母親の体内の「羊水」や「海水」を示しているともとれる。ロンドンは、死後、サンフランシスコから北方約80キロにあるグレン・エレンのアメリカ杉に囲まれた森の中

にある苔の生えた墓石の中から、星になって世界中を駆けているのか、また、下界の後世の人々を温かく、かつ厳しく見守っているのだろうか。その答えは、わたしたち一人一人の心の中にあると思う。



「ロンドンの墓」（2009年1月16日筆者撮影）苔に包まれた墓石から、新しい生命が生まれているようだ。

Ⅵ. ロンドンの再評価

Lawrence I. Berkove は *JACK LONDON One Hundred Years a Writer* (2002) において、Jack London's "Second Thoughts" The Short Fiction of His Late Period という論文の中で、「ユングの影響を受けて死の直前に書いた小説を除いて、晩年のロンドンの短篇の大半は金儲けのためのお粗末な内容のものであった、とつい最近まで一般的に信じられていた。しかしながら、最近の研究によると、質が落ちているどころか知的で洗練されて鋭さが増しており、彼の晩年の作品は新しい芸術的極地に達している」（Berkove, 2002: 61）と語っている。

Berkove はまた同書で、晩年を「1909年に南国から病気のために帰国してからが彼の晩年で、その時期にそれまでの考えを再検討して、大幅に変更した」と述べた（p. 61）後、「ロンドンにはバランスのある人格を探求した結果として、ダーウィンの進化論に加えて、人間の心理状態に興味を持ちはじめた」（Berkove, 2002: 71）と記述している。

そして、Berkove は論文の結論として、「ロンドンは晩年に人生の意味についての重大な発見をし、繊細で巧妙な短篇小説を会得した。そのようなロンドンの晩年の短篇小説は、50年間、ロンドンの研究者によって理解されなかった」（Berkove, 2002: 75）と、説明している。

東京大学教授で翻訳家の柴田元幸氏は、柴田元幸翻訳叢書『火を熾す』（2008）で「1本1本の質を最優先するとともに、作風の多様性も伝わるよう、ロンドンの短篇小説群の中から9本を選んで訳した」作品のうち、彼の晩年（Berkove の定義に従うならば）の作品4本を取り上げている。（「1枚のステーキ」、「メキシコ人」、「戦争」、「水の子」）また柴田氏は、ロンドンが生きることを外と内なる闘争も含めて長い苦闘と捉えており、約200本に及ぶ短篇小説がとても重要であると以下のように述べている。

内容的にも、生きることを一相手が苛酷な自然であれ、ボクシングの対戦相手であれ、内なる他者であれ—基本的にひとつの長い苦闘と捉えていたロンドンの人生観が、凝縮された、かつ1本1本異なった多彩な形で表現された媒体として、短篇小説がひときわ重要であるのは疑いのないところだろう。（柴田, 2008: 243）

有馬容子氏は、「ロンドンは現在では、エドガー・アラン・ポーに次ぐ創意に富んだ短編作家

としても評価されている。しかし、彼が数々の幻想的な作品を書き残していたことが広く知られるようになったのは、1980年代になってからであった」（有馬，2008：213-214）と紹介し、それ以降になってはじめて、ロンドンの作品が人間の内面や現実の神秘にも及び、それらを扱った作品もとても多いと次のように述べている。

『ジャック・ロンドン書簡集』全3巻（*The Letters of Jack London*, 1988）の出版とあわせて、『ジャック・ロンドン短編全集』によって、それまで埋もれていた短編を含む197編が容易に読めるようになると、ロンドンの関心が人間の内面や現実の神秘にまで及ぶ、奥深いものであったことが研究者に広く知られるようになったのである。また、そのような環境が整ってからはじめて、南太平洋を舞台にして形而上学的テーマを扱った不思議な物語を含む作品が、彼の男性的冒険小説を代表する有名な作品群、クロナダイク地方を舞台にした作品に次ぐほどの数を占めていることもわかったのである。（有馬，2008：214）

日本におけるロンドンの作品の影響を、中田幸子氏は『父祖たちの神々』の「はじめに」等で詳しく述べている。それを要約すると以下のようになると思う。（中田，1991：16-19, 91-156）

- 1) 第1の時代は、ロンドンという名前が初めて雑誌『太陽』に現れた1902年（明治35年）から、彼の没年である1916年（大正5年）までである。ロンドン自身来日しているが、読者大衆には『荒野の呼び声』も『ホワイト・ファンク』もまだ知られていない。
- 2) 第2の時代は、ロンドンの死にきびすを接して第1次世界大戦が終了し、文字どおり新しい時代に入ったころから始まる。大正デモクラシーの時代、一般民衆が時代の表面に姿を現し、それが、文学・芸術の分野で「大正期の人民的、革命的な文学動向」となったまさにその時期に、ロンドンは日本で大流行した。これは、具体的には堺利彦訳『野性の呼声』でロンドンに接するようになる。そして、『ホワイト・ファンク』というような極北・動物文学の作品をはじめ、『奈落の人々』（『どん底の人々』）や『鉄の踵』というような社会主義の作品なども読まれるようになった。彼は、「人間を愛する」という素朴な動機によって社会主義を説き、人間の幸福に関する発言を残したが、この点で日本人は彼に共感するところが大きかった。
- 3) 第2次世界大戦後の第3の時代が始まると、復活したアメリカとの関係のもとに大きくなったアメリカ文学への関心の一端として、ロンドンも新たな脚光を浴びることになる。そして、『荒野の呼び声』や『白い牙』は、古典的名作として不動の位置を獲得した。
- 4) ロンドンの生誕100年にあたる1976年を中心に、欧米ではロンドンを再評価する動きが盛んであったが、この現象は日本でも見られ、彼の作品選集（原典の復刻）24巻の刊行（1989年、本の友社）という快挙に結実している。第4の時代と言える。

辻井榮滋氏は、『ジャック・ロンドン カリフォルニア紀行』のなかで、1970年代までの日本におけるロンドンの翻訳本について、次のように説明して、「動物小説作家」のみのイメージを払拭しようと、他の優れた作品の翻訳紹介に努めたとしている。

わが国においても、大正から昭和のはじめにかけてかなりの作品が翻訳紹介され、当時の翻訳者のなかには山本政喜、和気律次郎、堺利彦ら^{そつそつ}錚々たる名前が見えます。また、白樺派の作家・有島武郎にも少なからず影響を与えました。ところが、戦中から戦後にかけては、なぜか『野性の呼び声』（または『荒野の呼び声』）と『白（い）牙』の2作のみによって知られるにすぎない作家に甘んじつづけてきました。（辻井，2008：10-11）

日本においても1970年代以降、ロンドンとその多くの作品が紹介されるようになり、再評価の機運が高まってきた。辻井榮滋氏を中心に上記の2作品以外にもいろいろな分野で数多く翻訳され、日本ジャック・ロンドン協会やその読書会を中心に一般の人々にも知られるようになった。（2005年には『二十世紀最大のロングセラー作家—ジャック・ロンドンって何者？』、2008年には『ジャック・ロンドン カリフォルニア紀行』、そして2009年には『ジャック・ロンドン讃歌』が出版された）また、社会的・時代的背景については中田幸子氏や辻井榮滋氏の著書や論文に負うところが大きい。

幻想文学については2008年に、柴田元幸氏が上掲の短篇集で「水の子」を紹介している。また、有森容子氏は同年、ロンドンの幻想文学である5作品（「夜の精」、「赤い球体」、「コックリ占い板」、「古代のアルゴスのように」、「水の子」）の短篇集を出版している。

今日、ロンドンは多くの言語に翻訳され、世界中の人々に知られるようになってきている。Labor は、The Portable JACK LONDON の Introduction (xii) でロンドンがたいへん偉大で世界中で人気があることを次のように説明している。

- 1) As early as 1914, for example, Georg Brandes singled out London as the best of the new twentieth-century American writers.
- 2) Anatole France praised London for possessing “that particular genius which perceives what is hidden from the common herd.”
- 3) Russian critic Vil Bykov has compared London favorably with Tolstoy and Chekhov in their common pursuit of “the man of noble spirit,” noting that, along with the essential vitality of London’s works, it was this theme, more than his socialistic ideas, that made him the most popular foreign writer in the Soviet Union.
- 4) Beijing University professor Li Shuyan has asserted that “whatever happens in the critical world, London will go on enjoying the admiration of the Chinese readers. Martin Eden and the many heroes of London’s stories of the North will always be an encouraging force to those who are fighting against adversities, and who believe the worth of man lies in doing, creating, and achieving.”

現在では、日本ジャック・ロンドン協会のホームページで当協会の活動やロンドンの作品紹介、リンク集などが紹介されている。（http://www2d.biglobe.ne.jp/~to_yoshi/JLJAPAN.htm）さらにアメリカの次のホームページで、ロンドンに関する詳細な情報や、ほとんどすべての作品や興味深いエッセイが英語で閲覧できる。

The Jack London Online Collection : <http://london.sonoma.edu/>

The World of Jack London : <http://www.jacklondon.net/index.html>

ロンドンに関する日本における最近の再評価を総括すると、幻想文学も含めて過去にはなかったいろいろな分野の作品や著書が紹介、出版され、学者から一般読者まで日本語や英語の情報が容易に入手することが可能になりつつある。このような状況を考慮すると、ロンドンの第5の再評価がすでに始まっているのかもしれない。彼の作品は時空を超え、私たちに現代社会に生きる意味を問いかけているのである。ロンドンの多くの職業、価値観、社会経験、そして作品のテーマは、複雑な今日の世界（グローバル化、格差社会、孤立、高齢化、リスクの多い時代、テロの時代、宗教対立、心の不安定など）を解明する手がかりとなりうる。複雑な社会には複雑な作家が必要なのである。

結 論

ロンドンの唯物主義は急激に精神主義になったのではなく、生まれたときから両者が併存しており、二重人格などと批判されてきた。その後、徐々に精神主義の比重が増してきたが、晩年になっていろいろな要素が重なり、ますます唯物主義に疑問を抱くようになる。『星を駆ける者』の出版後の1915年9月22日、“Letter to Oscar Pavel”でロンドンは「輪廻転生を信じていない」（Wilson, Margie, 2001:82）と述べているが、精神主義が相当比重を高めていたことは疑問の余地がない。死ぬ直前になり、「水の子」を書いた段階でも完全には唯物主義から脱却していないが（遺産問題等）、ほぼ悟りの境地に入っていることが物語の内容や生命の森と生物・動物たちに囲まれた苔が生えている質素な墓からも想像がつく。仏教の「三世因果の道理」において、過去（生前：先祖ではない）、現在（生）、未来（死後：子供ではない）は1つの線上にあり、個人の行為が「アラヤ識」と呼ばれる心を蓄積する空間に入り、肉体は滅びても精神は永遠に生きる。行為は「縁：えん」（空気、水、土、光、生物など、人間の生活に間接的に不可欠なもの）とともに結果を生み出す。⁶⁾このような仏教思想の中にロンドンは、時空を超えた真実を見いだしたのであろう。

理想と現実との矛盾に悩まされ、真理や英知を追求する努力がロンドンの文学となり、人間の普遍的な課題を見事な創作力、構成力、技巧で20世紀を代表するアメリカの作家の1人になり、作品は今なお世界中の人々に影響を与えている。彼は自殺を勧奨したり、精神主義だけが人類の死守すべき唯一の価値観だとは言っていない。現実の世界において、時を超えて（学問等による）、空間を越えて（冒険旅行等による）「生にしがみついて」日常生活に必要なお金を稼ぎ、真実や英知に近づく努力をし、死が避けられ状態になれば、「生の掟」に基づいて運命に身をゆだねるべきである、と主張しているのである。つまり、ロンドンの晩年の作品は、それ以前の「わくわくするような力強いもの」ではなく、「世界と人間をありのままに捉えようとする内的なもの」である。東洋的な思想が色濃く現れているように思う。

事実は真理とは異なる。真理や英知は、非合理的で非論理的、非意識的、非理性的なもので、現実の世界や、心の外に見いだすことはむずかしい。それは大半が、心の奥深いところの無意識、

つまり幻想の中にある。前期のロンドンの多くの作品は、事実や唯物主義、合理主義に基づいて、写実的に現実の社会とその闘争を描いてきたが、後期、特に晩年になって、精神主義に基づいて心の奥底の無意識の世界を写実的に描写し、真実に近づき、精神の永続性を求め、その作品に時空を超えた普遍性を探求したので、なかなか現実の世界で闘っている人々には難解な面があることは否定できない。

幻想の世界に入るには、肉体に何らかのダメージを与えて意識を鈍らせ、混沌とした意識の状態にさせて幻想を見やすくさせる「合理的な精神を鈍らせる何らかの工夫」（有森、2008：229）が必要である。『ジョン・バーリコーン』の場合は「酒」であり、『星を駆ける者』の場合は「狭窄衣」であり、「赤い球体」の場合は「熱病」であり、「水の子」の場合は「船酔い」であった。これらの仕掛けは、ロンドンの闘争と重なり合う。人間の存在理由を明らかにし文明の進歩に貢献する心理や英知は、「死」という壊滅的な肉体へのダメージによって、精神は肉体と分離し、新たな真理や英知を求めて、時空を超えてさまよう。現実と非現実（幻想）の境界線は、『星を駆ける者』の場合、「精神集中による肉体離脱」であり、「水の子」の場合は「海面」である。

『ジョン・バーリコーン』や『星を駆ける者』という長篇の主人公も、「赤い球体」や「水の子」という短篇の主人公もすべてロンドンの分身であると思う。内容がすべて体験したことではないが、他人から学んだことも含めて少なくとも彼の心の奥深い無意識の幻想の世界に存在していたものであったであろう。現実の世界で成果（物質・精神両面で）をあげたロンドンの精神が、永眠後、作品や自伝、農園等により後生の世界中の人々に、人類が共通にかかえる問題点を考える有効な視点を与えつづけている。『星を駆ける者』と「水の子」は彼の最高の部類に入る作品で、後生のために古典としてますます出版、翻訳、論議、継承されることを切に望む。また、ロンドンの精神の永続性と幻想の研究が作品論を伴って、さらに広範囲にかつ深化することを期待する。

注

- 1) カリフォルニアの森林については、「世界で一番背の高い生き物と言われているコースト・レッドウッドが乾燥した厳しい気候に耐え、霧の水分によって太古の昔から生き続けている。現在確認されている最も背の高い木は112メートルもあり、30階建のビルに相当する。コースト・レッドウッドはラテン語で『永遠に生きる』という意味があり、樹齢が600年から1200年以上にもなり、時には2000年を超えるものもある」と『Lifestyle U.S.A.』（2002 Vol. 6 サン美術印刷株式会社編集、米国大使館商務部全面協力、pp. 42-44要約）で説明されている。
- 2) ロンドンの死因については、以前から世界中で論議されており、意見が分かれている。詳しくは、David A. Hartzell 作成の *The World of Jack London* (<http://www.jacklondon.net/index.html>) の“The Jack London Death Controversy”と、その中にある‘A Comparative Study’ by Lou Leal, edited by Laurie O’Hare を参照。（<http://www.jacklondon.net/writings/comparativeStudy/variousbiographers.html>）2009年6月4日アクセス。
- 3) 日本ジャック・ロンドン協会ニューズ・レター『呼び声』30号（2008年8月30日発行）の拙稿「ジャック・ロンドンの闘争と現代的意義」参照。
- 4) 「精神分析学の経験がわたしたちに教えていることは、世界は各々が心に抱いているようなものではなくないということである。（中略）世界とは限られた情報によって再構成された取りあえずの具体性でしかありえない。」『幻覚の構造』藤田博史著、1993、青土社、p. 81参照。

- 「幻視的な作品ではすべてが逆になっている。創造の内容を成す素材あるいは体験は、既知のものではなく、まったく別の世界からやって来たもの、心の背景に属するものであって、あたかも人類以前の太古の深みから、あるいは人間の手の届かぬ光と闇の世界から発しているかのような相を呈している。それは人間の力と理解力ではとても捉えられず、圧倒されてしまうような原体験なのである。」『創造する無意識：ユングの文芸論』Carl Gustav Jung 著，松代洋一訳，1996，平凡社，p.63参照。
- 5) 「影と光」についてのエッセイは、『ジャック・ロンドン讃歌』（辻井栄滋監修・編集，明文書房，2009）の拙稿「影と光」における競争社会の功罪 pp.92-100参照。
- 6) ロンドンは，1897年（21歳）6月30日に“O Haru”という作品を書いている。その中で，Buddha（釈迦）や Nirvana（仏教における涅槃：苦痛からの脱却）という言葉を用いて，心の平静や精神の永続性を表現している。このことから，以前から，仏教について興味や関心があり，それ以後も，相当，仏教について研究したと想像される。

参考文献：アルファベット順

- 有馬容子（2008）『ジャック・ロンドン幻想短編傑作集』有馬容子訳，「幻想文学作家としてのジャック・ロンドン訳者解説」，彩流社。
- Berkove, Lawrence（2002）“Jack London’s ‘Second Thoughts,’” in *Jack London* edited by Sara S. Hodson and Jeanne Campbell Reesman, The Huntington Library Press.
- Labor, Earle（1994）*The Portable Jack London*, edited and Introduction by Labor, The Penguin Group. (The Viking Portable Library).
- 森美樹和（1975）『星を駆ける者』（*The Star Rover*）ジャック・ロンドン著，森美樹和訳，国書刊行会。
- 中田幸子（1991）『父祖たちの神々』，国書刊行会。
- 大矢健（2006）「熱狂の唯物論が辿りついたところ」（『馬に乗った水夫—ジャック・ロンドン，創作と冒険と革命』アーヴィング・ストーン著，橋本福夫訳）早川書房。
- 柴田元幸（2008）『火を熾す』柴田元幸翻訳叢書ジャック・ロンドン，スイッチ・パブリッシング。
- Sinclair, Andrew（1989）‘Introduction’ in Jack London’s *Tales of the Pacific*, The Penguin Group.
- Stasz, Clarice（1999）*American Dreamers: Charmian and Jack London*, toExcel.
- 辻井栄滋（2001）『地球的作家 ジャック・ロンドンを読み解く』丹精社。
- （2004）『地球を駆けぬけたカリフォルニア作家』（改訂版）*A Pictorial Life of Jack London* ラス・キングマン著，本の友社。
- （2005a）『二十世紀最大のロングセラー作家—ジャック・ロンドンって何者？』丹精社。
- （2005b）「アメリカ浮浪記」（『決定版ジャック・ロンドン選集3』）ジャック・ロンドン著，本の友社。
- （2006a）「マーティン・イーデン」（『決定版ジャック・ロンドン選集4』）ジャック・ロンドン著，本の友社。
- （2006b）「ジョン・バーリコーン」（『決定版ジャック・ロンドン選集5』）ジャック・ロンドン著，本の友社。
- （2008）『ジャック・ロンドン カリフォルニア紀行』明文書房。
- 辻井栄滋・森孝晴（1999）「影と光」ジャック・ロンドン著，森孝晴訳『アメリカ残酷物語』，新樹社。
- 内野信幸・斎藤忠志（1996）「ジャック・ロンドンに関する年表」（『ジャック・ロンドン』（再版）大浦暁生監修，ジャック・ロンドン研究会編），三友社出版。
- Williams, James（1987）“Authorial Choice and Textual Meaning: The Sources of *the Star Rover* (Part One),” in *Jack London Newsletter* edited by Hensley C. Woodbridge, Southern Illinois University.
- Wilson, Margie（2001）*The Wit and Wisdom of Jack London*, WORDSWORTH™.
- Wilson, Mike（2001）*Jack London’s Klondike Adventure*, WORDSWORTH™.

Jack London's Spiritual Eternity and Fantasy

— centered on *The Star Rover* and “The Water Baby” —

YOSHIKAWA, Toshihiro

Abstract

This thesis is intended to show that Jack London (1876-1916) culminated in later years in terms of both his quest for meaning in life and his works of literature. It is often pointed out that London was extremely materialistic throughout his whole life and wrote only for profit. He did believe in the soul, but he had to make every possible effort to support his family and himself. He was a born fighter and wrote such great novels as *The Call of the Wild*, *White Fang*, and *Martin Eden*, which led him to one of the leading authors in the world as well as in his country.

London was consistent with his search for truth throughout his life. He changed his ideas about life and his style of writing dramatically in later years due to various reasons such as his sickness and aging, the burning out of his gorgeous “Wolf House,” and his encounter with Hawaii and Jung's *Psychology of the Unconscious*. He began to put more emphasis on the search for the inner truth and perceive the world and himself by jumping into the depth of unconsciousness. As a consequence, he wrote such great fantasy novels such as *The Star Rover* (*The Jacket*) and his last work “The Water Baby.” In these works, he displayed his talents with a subtle skill and depth beyond the abilities of critics of the next half-century to appreciate. Around the time of his death, he thought of transmitting his spirit to the next generation.

London's later works such as *The Star Rover* and “The Water Baby” are the results of his fighting efforts outside and inside of his self and are great masterpieces to share with the world beyond time and ideologies. They should be more read and discussed among the general public, so that they will be evaluated highly. It is firmly believed that these works will encourage many people suffering from identity crisis and insecurity in today's affluent but isolated society.